食傷丸

（那珂町）
昭和63年11月掲載

むかし、下江戸村（現在の那珂町下江戸）の斉藤家の作男が、静神社にお参りにでかけました。その帰り道、男は神社の裏山で大蛇が兎をのみこもうとしているところに出くわしました。

大蛇は、兎2匹をペロリとのみこむと、パンパンにふくらんだ腹をひきずりながら近くの草むらへ入り、ある草を食べはじめたのです。

すると、不思議なことに大蛇の腹は、見る見るうちに元通りになってしまいました。

（そうか、あの草は食べ物をとかす力があるのだ…こいつはいい。）

男は、大蛇の食べた草を刈りとると、家へ持ち帰り干してしまっておきました。

それからしばらく後のこと、男は、村の大食い競争で、みごと一等賞になり、賞金をもらうといそいで家へ帰りました。

今にも腹がはちきれそうでしたが、男はあの不思議な草をとり出すと、大量にのみこんで、寝てしまいました。

ところが次の日の朝、男の寝床は、もぬけのからで、ただ着ていた衣類と干し草が残っているだけでした。

斉藤家の人は、その草を粉にして少しずつのんでみました。すると、食べすぎによくきくので、家伝の秘薬とし、その後、この薬は「食傷丸」という名でひろく売られたということです。